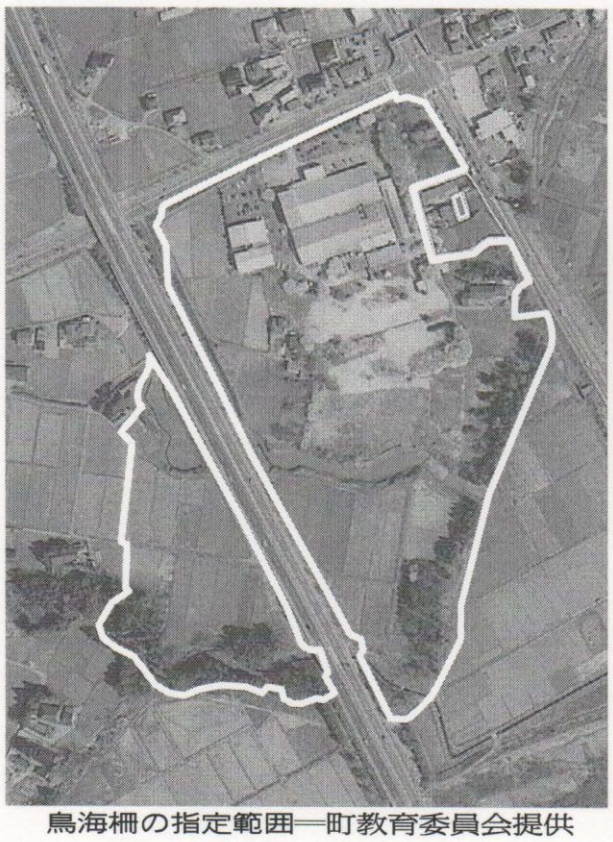
金ケ崎の国指定史跡

鳥海柵を知る

―町民大学2013シンポジウムより―

◇1



鳥海柵の指定範囲―町教育委員会提供

昨年10月、国史跡に指定された金ケ崎町の鳥海柵跡。町は本年度、同柵跡の保存管理計画策定に着手するほか、講座の開催など広く一般に理解を深める機会を提供していく方針だ。３月には町中央生涯教育センターで、同柵跡を主テーマとした町民大学のシンポジウムが開かれた。同柵跡の概要に加え、蝦夷社会から安倍氏、その後の清原氏（秋田県）、奥州藤原氏に至る時代背景など▷浅利英克（同センター文化係長）▷大平聡（宮城学院女子大教授）▷高橋信雄（花巻市博物館長）▷佐川正敏（東北学院大教授）▷高橋学（秋田県教育庁）▷本堂寿一（鳥海柵遺跡調査指導委員長）――の６氏による解説を12回にわたり紹介する。毎週日曜日掲載。（菊池藍）

浅利 英克氏（町中央生涯教育センター文化係長）

鳥海柵跡の概要 ㊤

本格調査 契機はインフラ整備

□国史跡に至る経過

最初の調査は1897（明治30）年に始まった。本格的な発掘調査は、西根遺跡調査として1958（昭和33）年から旧金ケ崎中学校の整備に伴い実施。その後、東北縦貫自動車道関連として72年と75年に、79年には国道4号金ケ崎バイパスの整備に伴う調査が行われた。

これらの調査を踏まえて鳥海柵の可能性が見いだされ、文化庁の助言指導により、2003（平成15）年から町教育委員会による確認調査がスタートした。12年度まで19回にわたり発掘調査を行い、09年に町教委が鳥海柵と断定。13年10月17日、国指定史跡として官報告示された。

× × × ×

□陸奥話記と「柵」

鳥海柵とは、陸奥の豪族・安倍氏の柵（拠点）の一つ。前九年合戦を記録した平安時代の軍記物語「陸奥話記」に登場する。

安倍氏は地元を代表して胆沢城に出入りした役人で、10世紀後半、胆沢城の権威を背景に奥六郡（胆沢、江刺、和賀、稗貫、紫波、岩手）を治めるようになる。安倍氏の勢力が拡大するとともに、陸奥守との仲が悪くなり、これにより前九年合戦が起こった。

かつて蝦夷社会（7―8世紀）に対する中央政府の侵略で、坂上田村麻呂とアテルイ、モレらとの戦いが起きた。その後、アテルイ、モレが降伏し胆沢城が造られる。その次の時代として前九年合戦、安倍氏の時代がある。その後には、世界遺産となった奥州藤原氏の時代となる。

文献によると安倍氏一族は、北上川流域に12の柵を置いて一帯を治めたとされる。金ケ崎町の鳥海柵は、鳥海三郎宗任、安倍氏当主頼良の三男の柵。

「陸奥話記」によると、鳥海柵は安倍氏の当主頼良が亡くなった場所。また安倍氏を倒した源頼義が、鳥海柵に入ることができた時に「鳥海柵は聞いていたが、その姿すら見ることができなかった。その鳥海柵にやっと入ることができた」と感激したという記述がある。それほど重要性が認められていた柵と考えられる。

× × × ×

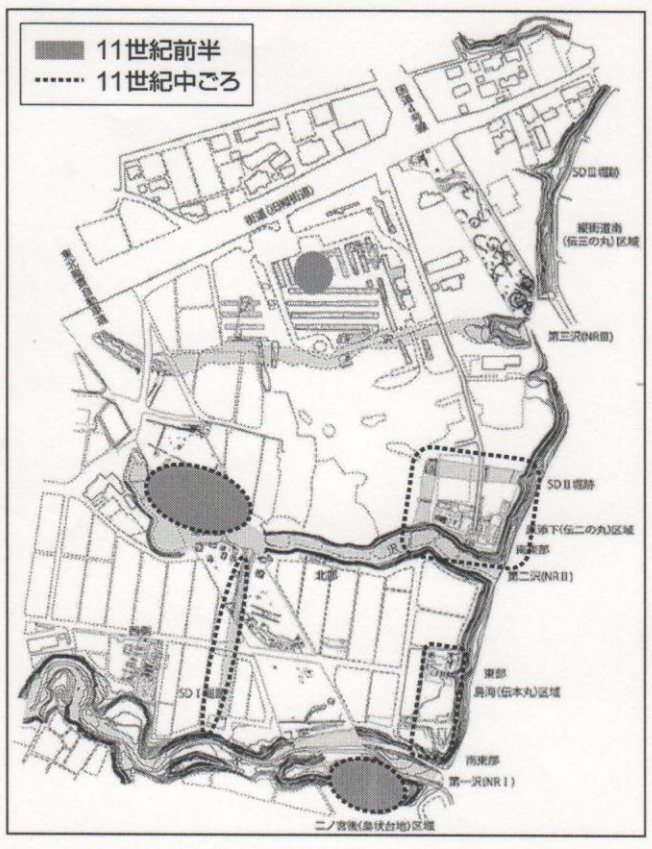
□立地場所と構造

北上川と胆沢川の合流点から西北西約2・5キロの場所にある。中央の拠点施設だった鎮守府胆沢城から北西2キロの距離にあり、胆沢川を挟んで対岸に位置する。

遺跡の東側と南側は二つの川に囲まれ、三つの沢で四つの台地に区画されている。北から、縦街道南区域、原添下区域、鳥海区域、二ノ宮後区域と呼んでいる。江戸時代の文献には、鳥海区域が本丸、原添下区域が二の丸、縦街道南区域が三の丸と記述された図面が残っている。

鳥海柵跡内には、▽蝦夷時代▽胆沢城統治時代▽安倍氏時代▽奥州藤原氏時代――の遺構が複数確認されているが、最も多いのが11世紀前半から中ごろの安倍氏時代である。

（つづく）



11世紀前半と中ごろの遺構分布図

胆江日日新聞　2014年(平成26年)4月13日(日曜日)　掲載記事